

おわりに

本書は、本シリーズ「アジアを見る眼」一八、本村眞澄著『石油大国ロシアの復活』と、ブルッキングス研究所の対外政策部門の主任研究員であるヒルが書いた *Energy Empire: Oil, Gas and Russia's Revival* という小冊子の二つに触発されて書かれた。前者はロシアの石油・ガス開発やパイプラインをめぐる詳細な分析を行っている。後者はロシアの外交戦略と石油や天然ガスとの関連が分析されている。いずれも、第一級のロシア研究といえよう。

しかし、いずれにおいても、個別具体的な石油会社やガス会社の分析が行われているわけではない。大規模な資源関連の企業集団と政治家との関係についても、個別具体的な記述はない。本書はこうした部分を補いながら、資源大国ロシアが現在、政治家、官僚、企業家が一体となつてどのような方向に向かいつつあるのかを探ろうとしている。そのために、筆者は石油とガスのパイプラインをめぐる詳細な分析を試みると同時に、個別の石油・ガス会社について考察した。しかし、前者は紙幅の関係で割愛せざるを得なかった。

これについては、二一 七年に法政大学出版局から上梓する予定の『パイプラインの政治経済学』を参照されたい。

本書は、最終稿を本村氏に目を通していただき、ご注意をいただいた上で一部、手直しして完成した。ここに、本村氏に改めて感謝の意を表したい。また、注意深く拙稿をお読みいただき、編集の労をとってくださったアジア経済研究所の新田淳一氏にも篤く御礼申し上げます。最後に、本書執筆にあたって、資料収集などで協力していただいたロシア科学アカデミー極東研究所の主任研究員V・グリニョーク氏にも感謝したい。

なお、本書は平成十七 十八年度科学研究費基盤研究(C)の研究成果の一部である。

二 六年七月

学術博士 塩原俊彦